

VR発達障害

他人事で見ていたことも

“一人称”で体験するとちがって見えるはず



発達障害がある人が持つ特性は、言葉だけでは理解されにくいものが多く、「親の育て方が悪い」「わがまま」「本人の努力不足」等と言われてしまうことがあります。

VR発達障害は、発達障害のいくつかの特性をVRで一人称で体験するものです。発達障害を「学ぶ」のではなく「体験する」ことで、日々の対話のすれちがいに気づき、新しい関係づくりに繋げていくことを目指しています。

100,000人以上が体験したVR Angle Shift ～発達障害編～

■感覚過敏【聴覚編】

多くの発達障害当事者に聴覚の過敏が認められています。聴力があるのに聴覚的情報がとりづらい感覚とはどういうことかを一人称で体験できます。



■感覚過敏【視覚編】

疲労が溜まったり不安が強くなったりすると、症状が出やすくなることが多い視覚過敏の症状を一人称で体験できます。



■ADHD【不注意優勢型】

ケアレスミスが多い、約束を忘れてしまう、物をよく失くすといった、不注意を起因とする症状が主に現れるADHD 不注意優勢型の一人称体験です。



■当事者インタビュー

VR発達障害のプログラムは、VR体験に加えて、VR制作にご協力いただいた当事者インタビューも視聴し、発達障害に対する理解に繋がります。

※ ホームページにて、当事者インタビューの一部を視聴可能です。

<https://angleshift.jp/identity/>



yu-kaさん（ADHD不注意優勢型 当事者）
大学時代にADHD不注意優勢型と診断された。きっかけは、飲食のアルバイトで「周りの人と同じようにできない」と悩んだことだった。つまりくことも多かったが、耳から聞いた情報を記憶することが得意なことに気づき、現在はその特性を活かし、インタビューをもとにその人を応援する曲を届けるシンガーソングライターとして活動している。

吉野 公篤さん（五感の感覚過敏 当事者）
幼少時代から周囲に「変わり者」と言われていたが、母親からは「そのままが良い」と育てられた。中学で不登校になり高校は定時制に通学。母親の介護をきっかけに資格を取得し26歳で介護業界へ。33歳の時にASD（自閉スペクトラム症）、ADHD、LD（計算障害）と診断を受ける。現在は相談支援専門員として障害者の支援をする傍ら当事者同士の活動を支援している。

■体験者の声

本などでわかっていたつもりのこと、実体験すると違うなと思うことがありました。

●医療従事者

自分の子供がアスペルガー、ADHDで彼の困難さがわかって涙が出ました。

●家族

360° 見渡せるので臨場感があり、リアリティがあった。思わずあとずさったり、耳をふさぎたくなったり、目の前を払いたくなったり、体感することができたと思う。

●その他

今回の体験を受けて「健常者」とは何だという疑問ができました。「障害者」とは何か？聴覚・視覚が他より鋭いだけで、私達と何もかわらないと思いました。

●学生